

農村地域発祥のレクリエーションスポーツ愛好者の専門志向化に関する研究:ビーチボールに着目して

中村祐太郎*

A study on the specialization of recreational sports enthusiasts developed in rural areas: Focusing on beach balls

NAKAMURA Yutaro*

The purpose of this study was to clarify the specialization of beach ball enthusiasts, a recreational sport that originated in rural areas, using a specialization scale. The survey was conducted by questionnaire surveying participants of a tournament held on July 28, 2024.

As a result, it was inferred that beach ball is played by people of a wide range of ages, mainly middle-aged and elderly people, and that players do not belong to a fixed team, but join various teams and participate in activities. It was also revealed that beach ball is played regardless of whether or not they have previous volleyball experience. It was also revealed that beach ball enthusiasts have a wide range of purposes for playing, such as not only enjoying the fun of the sport, but also winning games and playing as a purpose in life. The participants' attachment-related items on the recreation specialization scale showed the highest values, indicating that they have an attachment to beach ball.

キーワード: レクリエーションスポーツ, 専門志向化, 地域振興, 愛好者特性

1. はじめに

1.1 本研究の対象種目

本研究の対象種目は 1979 年(昭和 54 年)に富山県朝日町で誕生したスポーツであるビーチボールについて着目する。発祥地域の富山県朝日町では、昭和 30 年代に農作業での前屈みの姿勢による「腰曲がりの予防」のためにバレーボール競技が導入され、住民たちの間で盛んに行われていた素地があった⁽¹⁾。その後、当時の体育指導委員(現スポーツ推進委員)によりルールを整備、ボールの開発等が行われ全国各地への普及が進められた。ビーチボールは既存のバトミントンコート、支柱、ネットを使用し、1 チーム 4 人組で行うことから設備や人数の確保が容易にでき、どの

ような対象者にとっても取り組みやすいスポーツとして知られている。現在、日本ビーチボール協会に加盟している都道府県は 1 都 12 県、加盟はしていないが活動チームが確認されている都道府県が 1 道 2 府 14 県と合わせて 30 の都道府県にまで普及が拡大している⁽²⁾。特に発祥地である富山県内では、県民の日常におけるスポーツ活動として親しまれているだけでなく、学校の体育授業にも積極的に取り入れられており、種目の取り組みやすさの観点からバレーボール競技の導入やネット型スポーツとしての単位の中で用いられている。6 人制バレーボールとの楽しさや各技術面の難易度における比較を行った研究では、特に自己の体力や運動能力に自信がない者にとってビーチボールの方が楽しい、サーブ・アタック・ブロック・レシーブの各技術においても総じて難易度が低いと感じられていることが報告されており⁽³⁾、より幅広い運動レベルの人々が親しむことのできるスポーツ種目として捉えられる。

* 一般教養科

e-mail: nakamura-y@nc-toyama.ac.jp

ビーチボールの特徴として以下の点が挙げられる⁽⁴⁾。

- ①狭い場所でも手軽にできる。(実施可能場所の容易さ)
- ②ボールが柔らかいので突き指の心配がない。(怪我の発生率の抑制)
- ③ボールのスピードがやや遅いため、ボールをどこまでも追いかけるため運動量が多くなる。(運動量の確保)
- ④誰でもすぐプレーを楽しむことができる。(取り組み易さ)
- ⑤ボールが適当に変化するので意外性に富み、腰曲がりの予防になる。(障害の予防)

ビーチボールは農村地域の中高齢者に適したバレーボール型のスポーツとして考案され、「いつでも・どこでも・誰でも」というキャッチコピーのもと発祥地域の行政をも巻き込みながら普及が遂げられてきた⁽⁵⁾。このような特性を持つ競技は他のスポーツ種目を鑑みても非常に珍しいことが推察され、富山県が持つ貴重なスポーツ資源の1つとして、全国的な普及の可能性を秘めていることが窺える。

1.2 レクリエーションスポーツの定義

レクリエーション(re-creation)の元々の語源は仕事・勉強などの肉体的・精神的疲労を癒し、元気を回復するために休養をとったり娯楽を行ったりすること⁽⁶⁾である。また、(財)日本レクリエーション協会ではレクリエーションを楽しむ・健康・交流を求めて主として自由時間に行う諸活動であり社会的活力を生むものとしており、その中でスポーツとして行うレクリエーションのことを「スポーツ・レクリエーション」と呼んでいる⁽⁷⁾。このようなスポーツを通したレクリエーション活動に関しては、幅広い年齢層の人々が楽しめるよう、既存の競技から派生したものや全く新しいスポーツとして開発されたものまで広く存在しており、国民のスポーツ実施に寄与している。本研究では上述した内容を踏まえつつ、先行研究を参考にレクリエーションスポーツを「誰でも手軽に楽しめるように開発されたスポーツ種目」⁽⁸⁾として狭義に捉え研究を進めることにする。本研究で扱うビーチボールについても種目の特性や開発の経緯

を踏まえるとレクリエーションスポーツの1つであることがいえる。

1.3 専門志向化に関する研究動向

専門志向化は、Brayan⁽⁹⁾の研究に端を発し、レクリエーション活動に関する行動様式を発達させると、同時に活動に対する態度も変容することが説明されており、「レクリエーションの専門志向化(Recreational specialization)」として活動者の特徴を捉える概念として広く確立されている。McIntyre and Pigram⁽¹⁰⁾はBrayanの最初の研究には含まれていなかった感情局面を追加し、行動局面と認知局面とを合わせた3局面によるレクリエーションの専門化モデルを構築した(図1)。

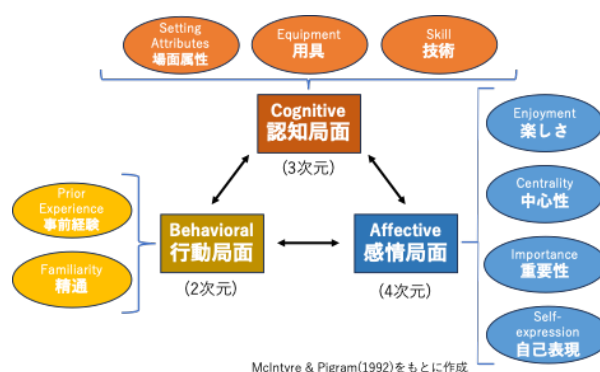


図1. レクリエーションの専門志向化モデル

これらの研究を皮切りにレクリエーション活動における専門志向化研究は国内外で広く行われ、活動に取り組む参加者を同質のグループに類型化するための有効な概念枠組みとして活用されてきている⁽¹¹⁾。これまでの専門志向化に関する研究の成果を概観すると、さまざまなレクリエーション活動を、専門志向化モデルを用いて参加者を分類し、活動様式について明らかにする研究が多くなされている。具体的な例を挙げると、二宮らはウインドサーフィン参加者を活動頻度、使用する用具、技能レベル、専門書の購読などの4つの視点から「不定期参加者」「社会志向参加者」「競技志向参加者」「快楽志向参加者」の4つのタイプが存在することを明らかにしている⁽¹²⁾。Clifford and Phillipはフィッシング参加者を釣ろうとする魚の種類や目的、動機などの専門志向性に応じて5つの異なるグルー

ブが存在することを明らかにしている⁽¹³⁾。James and David はバードウォッチャーをスキル、参加頻度、年間支出、住まいからの距離などの観点から 2 つのセグメントに分類し、参加する際の情報源、場面設定の好み参加特性によって大きな違いがみられることを明らかにしている⁽¹⁴⁾。Chin and Pei はサイクリストの専門志向化レベルに応じて自転車ルートの選択行動に違いが出ることを明らかにし、専門志向性の高低によって難易度の高いルートや持久力を要するルートを選択する傾向が強いことを明らかにしている⁽¹⁵⁾。松本・千足はスキューバダイバーを対象にインタビューを通して専門志向性の形成過程による類型化分析を行っており、「コミュニティ」「志向」「技術」のサブカテゴリーから 6 つのタイプに類型化している。また、6 つのタイプごとにその専門志向性の違いが主観的幸福感やレジャー満足度への影響の与え方にも違いが生ずることを報告している⁽¹⁶⁾。以上の通り、専門志向化に関する研究は、定量的・定性的研究を通じ参加者を類型化して特性を把握するための方法として用いられてきたほか、専門志向化の下位概念との関わりを調査分析することで実施者の特性を把握する研究として寄与してきた。しかしながらこれまでの専門志向化に関する研究はその対象を、アウトドアスポーツ参加者を中心に展開されてきたことから、その他の種目、特に本研究で扱うような室内チーム型レクリエーションスポーツに関する研究や報告は乏しい現状にある。

1.4 本研究の目的

本研究では、これまで様々なレクリエーション活動の愛好者の特徴を捉える指標である専門志向化尺度を用いて、農村地域発祥のレクリエーションスポーツであるビーチボールの愛好者の専門志向性を明らかにすることを目的とする。本報告では、愛好者の類型化を進める前段階として、全体の専門志向化傾向に着目した研究を行うことにより研究目的の達成のための一資料を得る。本種目に興じる人々の特性や特徴を明確にすることにより、今後のビーチボールの普及ひいては国内の地域スポーツへの振興に寄与できれば幸いである。

2. 方法

2.1 調査対象者および調査方法

本研究では 2024 年 7 月 28 日に富山県内にて開催されたビーチボール大会に参加した選手を対象に調査を実施した。調査は大会運営元との協議により、事前に調査協力チームを選定し、大会当日の朝の受付時に出場選手分が封入された質問紙封筒を配布したのち、大会中に回答および提出を求めた。8 チーム計 40 部を配布し、回収数は 34 部となりその全てを分析対象とした(有効回答率 100%)。倫理的配慮として、質問紙の冒頭に本調査の趣旨説明ならびに回答者のプライバシー保護、他の機関への漏洩、目的外使用を一切行わないことを記載し、同意できる者にのみ回答を依頼した。

2.2 調査項目

調査項目は先行研究⁽¹⁷⁾⁽¹⁸⁾⁽¹⁹⁾⁽²⁰⁾における調査、尺度を参考に質問項目の設定を行った(表 1)。具体的には性別や年齢、職業や婚姻状況などの人口統計学的特性、ビーチボールの実施目的・開始要因や学生時代の部活動所属経験、ビーチボール歴、現チーム所属期間、1 週間あたりの平均練習参加回数や年間大会出場数などの行動学的特性、6 つの次元(技術次元:5 項目、知識次元:4 項目、愛着次元:3 項目、中心性次元:3 項目、自己表現次元:3 項目、精通次元:4 項目)に及ぶ専門志向化項目、ビーチボールの総合的な満足度であった。専門志向化項目および総合的な満足度については後の分析で活用するため、否定的選択を 1、肯定的選択を 5 とした 5 段階リッカートタイプ尺度を採用し、数値化することとした。また、本研究における専門志向化項目の尺度の信頼性を検討するため Cronbach の α 係数を算出した結果、自己表現次元において Nunnally and Bernstein が定める⁷⁰(21)を下回ったことから、項目が削除された場合の α 係数を参照し、3 項目のうち該当の 1 項目を削除した。その他の項目については基準値を上回っていたことから本研究で用いた専門志向化尺度の信頼性は確認された。

表 1. 本研究の質問項目と尺度

項目	変数	尺度
人口統計学的特性	性別	1. 男性 2. 女性
	年齢	現年齢
	職業	1. 会社員 2. 公務員／団体職員 3. 自営業 4. パート・アルバイト 5. 主婦（主夫） 6. 定年退職 7. 学生 8. その他
	婚姻状況	1. 配偶者なし・子供なし 2. 配偶者なし・子供あり 3. 配偶者あり・子供あり 4. 配偶者あり・子供なし
行動学的特性	ビーチボールの実施目的	1. 健康づくりのため 2. 試合や大会で勝利するため 3. 楽しむため 4. 自己の生きがいのため 5. その他（具体的に）
	ビーチボールの開始要因	1. （自己の体力や経験に合わせて）自分に合っている種目だと感じたから 2. 友人や家族、指導者などの自分以外の他者に勧められたから 3. 自身の住む地域や職場で盛んに行われていたから
	学生時代の部活動所属経験	1. バレーボール部所属経験あり 2. バレーボール部以外の運動部所属 3. 運動部への所属経験なし
	ビーチボール歴	調査時点の自身のビーチボール競技歴（年 月）
	現チーム所属期間	調査時点の自身の現チーム所属期間（年 月）
	平均練習参加回数／週	自身の1週間の平均練習参加回数（およそ 回）
	年間大会出場数	自身の1年間における大会出場回数（およそ 回）
専門志向化尺度	技術次元（ $\alpha = .821$ ）	1. 全く当てはまらない 2. あまり当てはまらない 3. どちらともいえない 4. まあ当てはまる 5. 非常に当てはまる
	知識次元（ $\alpha = .847$ ）	
	愛着次元（ $\alpha = .946$ ）	
	中心性次元（ $\alpha = .858$ ）	
	自己表現次元（ $\alpha = .752$ ）	
	精通次元（ $\alpha = .737$ ）	
ビーチボールの総合的な満足度		1. とても不満足 2. まあ不満足 3. どちらともいえない 4. まあ満足 5. とても満足

2.3 分析方法

まず、人口統計学的特性と行動学的特性および総合的な満足度については、調査データを単純集計し、サンプル数および割合を求め、それらを表にまとめた。次に、専門志向化に関する項目では回答者全体の平均値を求めたほか、専門志向化尺度内の6つの次元の平均値を比較するため、一元配置分散分析（有意な差がみられた項目においてはその後 Tukey による多重比較）を用いて各項目における平均値の差を検証した。なお、これらの統計処理については IBM SPSS Statistics 統計解析ソフト V29 を用いており、本研究における統計的な有意水準は5%とした。

3. 結果および考察

3.1 ビーチボール大会参加者の個人特性

本調査回答者における個人特性を表2にまとめた。性別に関しては、調査の対象チームを男性の部と女性の部に出場したそれぞれ4チームとしたこともあり、男性と女性がちょうど半数の割合となった。年齢の平均は58.65歳で、最小が23歳、最大が79歳であったことから、中高年を中心に幅広い年代の人々に取り組みされているスポーツであることが窺える。職業は「会社員」が最も多く、次いで「パート・アルバイト」であった。また、婚姻状況として「配偶者あり・子供あり」の割合が

66.7%と最も高く、結婚後、子育てをしながらもしくは子育てを終えた人々が多く競技に取り組んでいることが推察される。実施目的としては、「楽しむため」が35.3%であることを中心に、健康づくり(26.5%)や試合での勝利(20.6%)など、多岐にわたる目的を持った愛好者が存在することが明らかとなった。さらに、ビーチボールを開始した要因としては「自分に合っている種目であると感じた」割合が45.2%と最も高かった。次いで「他者に勧められたから」が32.3%、「地域や職場で盛んに行われていたから」が22.6%であった。学生時代の部活動所属経験では、バレーボール部所属経験ありの者が44.4%と半数以上は学生時代バレーボール部に所属していないことが明らかになった。バレーボールを専門的に取り組んできた者だけでなく、競技経験の有無問わず様々な人に取り組まれている種目であることが推察される。ビーチボールの競技歴の平均は327.56(±139.66)カ月と種目の誕生後40年ほどが経ち、誕生以後から継続的に実施している愛好者が多く存在していることが窺える。一方、現チームの所属期間は117.97(±132.29)カ月と経験歴とは大きな開きがみられた。同一のチームでやらずとも、4人1組で行える手軽さから様々なチームに所属できる点も本種目の特徴であり、このような結果を示したと推察できる。1週間あたりの平均練習参加回数は1.90(±0.87)回で年間の大会出場回数は7.19(±3.53)回であった。

表 2. 本調査回答者の個人特性

		n	%	Mean	SD	最小	最大
性別	男性	17	50.0%	58.65	15.84	23	79
	女性	17	50.0%				
職業	会社員	15	44.1%	327.56	139.66	24	600
	自営業	5	14.7%				
	パート・アルバイト	9	26.5%				
	定年退職	3	8.8%				
	専業主婦(夫)	1	2.9%				
	その他	1	2.9%				
婚姻状況	配偶者なし・子供なし	4	12.1%	117.97	132.29	0	456
	配偶者なし・子供あり	6	18.2%				
	配偶者あり・子供あり	22	66.7%				
	配偶者あり・子供なし	1	3.0%				
実施目的	健康づくりのため	9	26.5%	1.90	0.87	0	4
	試合や大会で勝利するため	7	20.6%				
	楽しむため	12	35.3%				
	自己の生きがいのため	5	14.7%				
	その他	1	2.9%				
開始要因	(自己の体力や技術レベルからみて)自分に合っている種目だと感じたから	14	45.2%	7.19	3.53	1	15
	(友人や家族、指導者など自分以外の)他者に勧められたから	10	32.3%				
	自分の住む地域や職場で盛んに行われていたから	7	22.6%				
部活動 所属経験	バレーボール部所属経験あり	12	44.4%	3.06	1.03	1	5
	バレーボール部以外の運動部	12	44.4%				
	運動部への所属経験なし	3	11.1%				

本調査対象とした大会は県ビーチボール協会が主催する大会であったが、その他にも日本ビーチボール協会主催大会や活動しているチームが独自に主催するローカルな大会など1年間に多くの大会が存在している。勝利を目的とする大会だけでなく、参加者同士の交流を目的としたレクリエーション的な大会も開催されていることから愛好者自身も自己の目的・志向に合った大会に積極的に参加できる。そうした背景が存在することも愛好者が進んで大会に参加できる要因となっているのではないだろうか。最後にビーチボールの総合的な満足度は3.06とほぼ中間位に位置していた。ビーチボールが全国的に普及していき、多くの人々に親しまれるためには種目に対する満足度も上げる必要があると考える。より満足度を高めるための取り組みや方法なども今後検討することが求められる。

3.2 ビーチボール大会参加者の専門志向性

今回のビーチボール大会参加者の専門志向化項目の結果は表3の通りである。自己のビーチボールに関する技術の認識や他者との主観的な技術比較などを示す「技術次元」の平均は3.54であり、ビーチボールに関する知識やルールの理解などを示す「知識次元」の平均は3.44であった。また、ビーチボールの楽しさの享受、自身にとっての重要性を示す「愛着次元」の平均は3.96で本項目の中で最も高い値を示してい

た。さらに、ビーチボールが自身の生活や人生の中の一部となっているかを示す「中心性次元」の平均は3.55であり、ビーチボールを通じた自己表現に関する認識を示す「自己表現次元」の平均は3.21と本項目の中で最も低い値を示していた。最後に、他のスポーツと比較してビーチボールの重要度を示す「精通次元」の平均は3.38であった。これら各種次元の平均値を、一元配置分散分析を通して比較したところ項目全体で有意な差が確認された。その後の多重比較により、自己表現次元と精通次元よりも愛着次元の方が有意に高い値を示していることが明らかとなった(図2)。今回の参加者については愛着要因が最も高い値を示していたことからビーチボールの種目自体に愛着をもち、自身の中での興味・楽しさ・重要性について他の要素よりもポジティブな認識を有していることが示唆された。

スポーツの愛着に関する研究は、様々な種目のチームに対する愛着や所属・開催地域への愛着というものに焦点が当てられた研究が多く進められている⁽²²⁾⁽²³⁾。一方、種目そのものの楽しさを味わうことは運動継続の理由にもつながっていることから⁽²⁴⁾、愛着度の高まりは種目の継続性に貢献することが考えられる。今回対象としたビーチボール愛好者においても種目に対する愛着が高いという結果を示したことは、今後ビーチボールが普及発展していく上で好影響を及ぼすことになるであろう。

表 3. 全体の専門志向化項目の平均値

項目<項目名>クロンバック α 係数	各質問毎の得点		各項目の得点		F値	有意確率	多重比較
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差			
項目1【技術次元】 α = .821 自身のビーチボールのスキルは高いレベルにあると思う ビーチボールの練習を十分行っていると感じている 私は運動能力に長けていると感じる 他の愛好者と比べて技術レベルが高い方だと感じる ビーチボールの技術を向上させることは私にとって重要である	3.65 3.35 3.53 3.41 3.76	0.92 0.92 0.90 0.96 0.82	3.54 0.69		3.828	0.002	自己表現次元、 精通次元 <愛着次元
項目2【知識次元】 α = .847 ビーチボールのルールについて十分理解している ビーチボールの審判技術について身についている 私はビーチボールに関する知識が豊富である ビーチボールの大会や試合の運営を自らが中心となり行える	4.03 3.59 3.50 2.56	0.80 0.96 0.93 1.04	3.44 0.77				
項目3【愛着次元】 α = .946 ビーチボールは最も楽しいことの1つである ビーチボールは私にとって興味深い ビーチボールは私にとって重要である	4.09 3.94 3.88	0.93 0.85 0.82	3.96 0.83				
項目4【中心性次元】 α = .858 私の人生の多くはビーチボールに依存している ビーチボールは私にとって重要な日常の活動になっている ビーチボールは私の人生の重要な役割を担っている	3.35 3.76 3.53	0.95 0.92 0.83	3.55 0.76				
項目5【自己表現次元】 α = .752 私はビーチボールを行っている時に本当の自分になれる 私がビーチボールを行っている時に周囲の人は私の望む見方で私を見てくれる	3.24 3.18	0.90 0.76	3.21 0.74				
項目6【精通次元】 α = .737 他のスポーツをしている時でもビーチボールのことを考える時がある 私は他のスポーツよりもビーチボールが好きである これまでビーチボールを続けてきたのだからこれからもビーチボールを続けることは私にとって重要である 親しい友人が他のスポーツを勧めてきたとしても私はビーチボールを選ぶ	2.38 3.85 3.76 3.56	0.89 0.83 0.92 0.96	3.38 0.67				

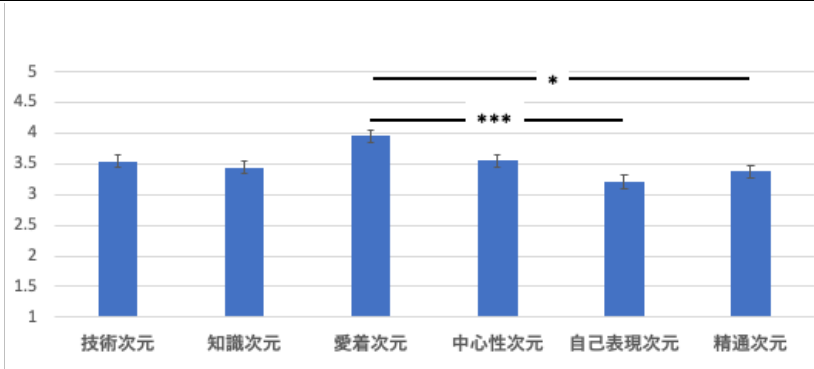


図 2. 専門志向化項目の平均値の比較

4. まとめ

本研究の目的は、これまで様々なレクリエーション活動の愛好者の特徴を捉える指標である専門志向化に関する尺度を用いて、農村地域発祥のレクリエーションスポーツであるビーチボールの愛好者の専門志向性を明らかにすることであった。本報告では、個人属性および全体の専門志向化傾向に着目した研究を通し、今後愛好者を類型化するための一指標となることを前提に分析を行った。その結果、以下の点についての示唆が得られた。まず、ビーチボールは中高年を中心に、幅広い年齢層の人々に取り組まれていた。その

中でずっと同じチームに所属するだけでなく、チームの作りやすさから所属チームが変化していることが窺えた。また、ビーチボールの実施目的は多岐に渡り、多様な目的を持つ人々が取り組んでいるスポーツであることが推察され、ビーチボールの種目特性から競技志向から楽しみ志向の人まで多くの人のスポーツ実施の受け皿となっていることが窺えた。さらに、愛好者の学生時代にバレーボール部の所属経験のある者よりもない者の方が多くを占めており、決して専門的なバレーボール経験を有する者ばかりでないことが明らかとなった。これはビーチボールがどのような人にも簡単に取り組むことができるスポーツであることが示され、今後の発展に期待できる結果となった。専門志向化に関する項目では今回のビーチボール大会参加者に

において愛着次元が最も高い結果を示していたことから、特にビーチボール愛好者は種目に対する愛着が高く、様々な日常行動の中で楽しみを享受できる 1 つの活動であることが示唆された。

本研究を通し、ビーチボール大会参加者の属性や専門志向化尺度に着目したことにより、ビーチボールに取り組む人々の特性や特徴の重要な示唆を得ることができた。研究の限界と今後の課題として、サンプル数の確保が挙げられる。今回の研究では愛好者を類型化する前段階の資料抽出を目的に行ったため小規模なサンプルでの分析となった。今後は本結果を 1 つの資料として活用するとともに、より大規模なサンプルを確保することでビーチボール愛好者全体の類型化を図り、一般化できるような結果を導き出していきたい。本研究結果がレクリエーションスポーツを通したスポーツ実施率の向上や地域スポーツの発展に貢献することを期待したい。

5. 参考文献(引用文献)

- (1) 笹川スポーツ財団, ビーチボールの概要, <https://www.ssf.or.jp/knowledge/dictionary/beachball.html>, (online)
- (2) 中村祐太郎, 仲野隆士, バレーボール型レクリエーションスポーツの普及発展に関する一考察: 第 40 回全国ビーチボール競技大会参加者への調査より, 日本生涯スポーツ学会第 25 回大会発表資料, (2023)
- (3) 中村祐太郎, ビーチボールバレーの発展に関する一考察: 6 人制バレーボールとの比較より, バレーボール研究, 23(1), 86, (2021)
- (4) ビーチボール競技公式サイト, ビーチボールとは, https://www.town.asahi.toyama.jp/section/buntai/beach/beach_ball.html, (online)
- (5) 中村祐太郎, 富山県発祥のスポーツ「ビーチボール」愛好者の特性からレクリエーションスポーツの普及発展の未来を探る, 令和 5 年度富山第一銀行奨学財団助成研究報告書, 189-198, (2024)
- (6) コトバンク, デジタル大辞泉, 「レクリエーション」の意味・読み・例文・類語, <https://kotobank.jp/>, (online)
- (7) (財)日本レクリエーション協会, 資料 3, https://www.mext.go.jp/component/a_menu/sports/detail/_icsFiles/fieldfile/2010/05/14/1293116_3.pdf(online)
- (8) 小川宏, レクリエーションスポーツの教育的意義について: コミュニケーションを促進するための教材価値の観点から, 体育・スポーツ哲学研究, 26(2), 35-45, (2004)
- (9) Bryan H., Leisure Value Systems and Recreational Specialization: The Case of Trout Fishermen, Journal of Leisure Research, 9(3), 174-187, (1977)
- (10) McIntyre N. and Pigram J. J., Recreation specialization Reexamined: The case of Vehicle-Based campers. Leisure Sciences, 14(1), 3-15, (1992)
- (11) 二宮浩彰ほか, レクリエーションの専門志向化: その研究動向と方法論, 体育学研究, 47, 319-331, (2002)
- (12) 二宮浩彰ほか, 専門志向化の概念枠組みによるウインドサーファーの類型化とその測定指標, レジャー・レクリエーション研究, 56, 1-10, (2006)
- (13) Clifford P. H. and Phillip W. B., Preferences, Specialization, and Management Attitudes of Trout Anglers Fishing in Tennessee Tailwaters, North American Journal of Fisheries Management, 27(4), 1257-1267, (2007)
- (14) James S. C. and David S., Segmenting participation in wildlife watching: A comparison of casual wildlife watchers and serious birders, Human Dimensions of Wildlife, 4(4), 44-61, (1999)
- (15) Ching-Fu C. and Pei-Chun C., Estimating recreational cyclists' preferences for bicycle routes – Evidence from Taiwan, Transport Policy, 26, 23-30, (2013)

- (16) 松本秀夫, 千足耕一, 海洋スポーツ・レクリエーションにおける専門志向化が主観的幸福感・レジャー満足度を与えた影響: スノーバダイバーを対象とした質的分析, 野外教育研究, 22(1), 19-36, (2018)
- (17) Schroeder S. A., Fulton D. C. et al., Identity and Specialization as a Waterfowl Hunter, Leisure Sciences, 35(3), 218-234, (2013)
- (18) Beardmore B., Haider W. et al., Evaluating the Ability of Specialization Indicators to Explain Fishing Preferences, Leisure Sciences, 35(3), 273-292, (2013)
- (19) 伊藤央二, 薮谷諒真, e スポーツプレイヤーの専門志向化要因とスポーツ歴およびテレビゲーム歴の関連性, スポーツ産業学研究, 31(4), 457-464, (2021)
- (20) 中村祐太郎, ソフトバレーボール愛好者の類型化とその特徴: 目的志向に着目して, バレーボール研究, 23(1), 1-10, (2021)
- (21) Nunnally J. C. and Bernstein I. H., “Psychometric theory” (McGraw-Hill, NY), (1994)
- (22) 藤原真由美ほか, プロスポーツファンのチーム愛着と地域愛着の関係性—北海道日本ハムファイターズのコアファンを対象に—, 日本地域政策研究, 28(0), 56-65, (2022)
- (23) 菅文彦ほか, チーム帰属意識と地域愛着の因果関係に関する考察: 今治フットボールクラブの本拠地である今治市の住民に焦点を当てて, スポーツ産業学研究, 28(1), 1-11, (2018)
- (24) 江口泰正ほか, 運動継続者に見られる継続理由の特色—労働者における運動継続への行動変容アプローチに関する研究—, 日健教誌, 27(3), 256-270, (2019)